

# 島根・トップコーチ

(第83号)平成22年4月20日

【発行】 財団法人 島根県体育協会

【担当課】 競技スポーツ課

〒690-0016

島根県松江市上乃木10丁目4番2号

島根県立水泳プール内

TEL 0852(60)5052

<http://www.shimane-sports.or.jp>

## 【第83号発刊にあたって】

第83号は、平成21年度の優秀な指導者に贈られる「岡田善富賞」を受賞された三洋電機ソフトボール部監督の菊川久美子氏に二度目のご登場をいただきました。

昨年は「ときめき新潟国体」で3位入賞に導かれる等、これまで全国大会で数々の実績を残してこられました。今回は最近のソフトボールへの思いや、取り組みについて語っていただきました。

## 【プロフィール】

昭和57年 東京女子体育大学卒業  
昭和57年 木次町立木次中学校勤務  
昭和57年 くにびき国体出場  
(島根県成年女子：準優勝)  
昭和58年 加茂町立加茂中学校勤務  
昭和62年 島根三洋電機(株)勤務  
女子ソフトボール部監督

## 【主な指導実績】

昭和58年 加茂中学校  
中学総体(中国大会)第3位  
昭和59年 加茂中学校  
中学総体(中国大会)第3位  
昭和62年～  
全日本実業団女子選手権大会連続出場  
(優勝：4回(三連覇含む)、3位：1回)  
昭和62年～  
全日本総合女子選手権大会連続出場  
昭和62年～平成7年  
成年女子S62沖縄国体～H7福島国体迄  
9年連続出場  
平成9年～  
成年女子H9大阪国体～H21新潟国体迄  
13年連続出場  
(優勝：1回, 3位：2回, 5位：1回, 7位：1回)

平成 元年～平成6年  
日本女子ソフトボール3部リーグ所属  
平成6年 入替え戦にて2部リーグへ昇格  
平成7年～平成22年  
日本女子ソフトボール2部リーグ所属  
(準優勝：1回、3位：4回)

## 『ソフトボールへの取り組み』

### 島根三洋電機(株)女子ソフトボール部 菊川久美子

#### 【はじめに】

二度目の原稿依頼に、諸先輩方が沢山いらっしゃる中で「私なんか偉そうに二度も引き受けてもいいのだろうか？」と戸惑いましたが、ソフトボールに携わって約40年。正直な所、ソフトボールに興味を持ち始めた小学生の頃は、まさか人生の半分以上をソフトボールが占めるとは思いもよりませんでした。今までの私の選手・指導者としての経験が少しでも参考になればと思い、依頼を引き受けさせて頂く事にしました。

又、島根県ソフトボール協会創立60周年、島根三洋電機(株)女子ソフトボール部創部30周年という節目の年にこのような依頼があるというのも何かの縁を感じます。

「島根・トップコーチ」としての原稿にはそぐわないかも知れませんが、島根県の指導者の方々に少しでも、島根県中・高校ソフトボールの実態や企業スポーツの苦悩が分かって頂ければ幸いです。

### 【指導者不足】

島根県中・高校の女子ソフトボールチームは、中学校（5）、高校（12）の計17チームしかありません。その中でソフトボール経験者が指導している学校は4チーム程しかありません。

ソフトボール競技では、投手の良し悪しで、勝敗が80%以上決まってしまう。その投手の指導を未経験者の先生方が行なうのはどうして無理な事だと思えますし、それで強いチームをつくれる訳がありません。伝統のある学校でも指導者不足の為、外部コーチを招請したりして、なんとか部を存続されている学校もありますが、長く続く訳がありません。

又、ソフトボールの監督には公認指導者資格が必要です。資格受講・申請の為には35,000円もお金も必要です。新しくソフトボール部の顧問になられた先生に、公認資格講習会を受講させるのも酷な話です。このままでは、ソフトボール部の顧問を引受ける先生がいなくなるのでは？と心配する今日この頃です。

北京オリンピックで日本の代表チームは見事優勝し、熱狂的なファンも増え、全国の学校では新チームも増えつつある時に、島根県では指導者不足でチーム力の低迷により、チーム数も減っているのが現状です。

何とか指導者不足やチームの減少を止める手立ては無いものでしょうか？

私も何か島根県の中・高校ソフトボールのレベルアップにお役に立てないかと考え、15年ほど前から中国地区の高校チームを強化合宿の名目で呼び、合同練習会に島根県の高橋チームも参加させ少しずつ底上げをしていこうと考えました。

（実業団の監督なのにおせっかいだと思われるかも知れませんが）

噂が噂を呼び、2年後には全国各地から集まってくれる様になりました。そこで、せっかくだから試合をさせてはどうかと考え、島根近県高等学校研修大会という名目で大会を開催する事にしました。開催当初は、中国地区のチームのみの参加でしたが、ここ4～5年の内に、インターハイ常連校も沢山参加頂き、インターハイさながらの熱戦を繰り広げています。島根県チ

ームも開催当初はコールド負けの連続でしたが、年を重ねるにつれ接戦が出来るまでに成長しました。

島根県高校ソフトボールのレベルアップに、貢献とまでは行かないかも知れませんが、“島根県でも努力次第で全国の強豪チームと互角に戦えるんだ”という自信と、全国大会でも物怖じしない精神力は身に付けられたのでは無いかと思えます。

今年も4/2（金）～4（日）の3日間、出雲ドーム・少年野球場・斐伊川河川敷公園グラウンドを借用し、12チームを集め行ないました。関係各位の方々には、ボランティアで沢山の協力を頂き感謝の気持ちで一杯です。

自分のチームをそっちのけで、大会運営をするのもいささか疲れて来ましたが、大会終了後の沢山の礼状や、地元チームの熱心な取り組みを見ていると疲れも吹き飛び、私が現役の監督でいる限りは15回～20回と続けて行きたいと思えます。

### 【国体への取り組み】

世界的な不況のあおりを受け、大企業でもスポーツチームの存続を断念していく中、弊社ソフトボール部は、今年も活動を存続させて頂く事と成りました。企業チームとして活動する限りは、会社にとって少しでもメリットが無いと続けていく意味がありません。

又、島根県の強化指定チームとしても、国体で得点を獲得し貢献しなくては、強化指定チームとしての意味を持ちません。

しかし、ここ数年は、どの大会においても「パッ」とせず、会社に対しても島根県に対しても、申し訳ない気持ちで一杯でした。

何とか結果を残して恩返ししたいと、臨んだ、大分国体・新潟国体への取組みについて述べたいと思えます。

第63回大分国体へ出場する為には、中国ブロック大会を1位突破する必要があります。問題は、同（2部）リーグで活動している岡山県成年女子（平林金属）とどう戦うかにポイン

トをおきました。リーグ戦での戦いは勝ったり負けたりで、殆ど力の差はありませんでした。力の差が無いとしたら、平林金属に負けない位の練習をするしか無いと考え、夏季休業の10日間は全て合宿とし“これだけ練習したんだから負けるわけが無い”という気持ちを叩き込みました。

ブロック大会は、広島に快勝し決勝の岡山戦へ、お互いに2点ずつを取り同点のまま7回裏の島根県の攻撃、自慢の足をつかいノーアウト満塁、打者は地元三刀屋高校出身の舟木選手。“外野フライでいいよ”と打席に送りました。結果はさよなら満塁ホームランで決着がつかしました。

地元島根県の選手がブロック大会決勝で、それもグランドスラムというとても偉業を達成した事に喜びを感じました。

本国体（大分国体）では、1回戦（v s 北海道）を2本のホームラン（久保、舟木）で快勝し、準々決勝の福岡県戦に備えていましたが、2日目も3日目も雨により中止となり、8チーム優勝という異例の結果で終わりました。福岡県（東芝北九州）戦は絶対の自信を持っていたので、とにかく試合がしたいというのがその時の気持ちで、優勝はしたものの複雑な思いで一杯でした。

第64回新潟国体のブロック大会は、地元島根県開催という事で、またまた、練習に練習を重ね開催会場（出雲市斐伊川河川敷公園グランド）の設置やグランド整備を行うという条件で、1週間練習をさせて頂きました。グランド条件は最悪でしたが、出雲市ソフトボール協会の方々にも協力頂き、立派な会場で練習が出来ました。

地元開催という事で、沢山の方に応援頂き、1回戦（v s 山口県）10対0のコールド勝ち。2回戦（v s 岡山県）7対0のコールド勝ち。決勝（v s 広島県）は苦しんだものの7対3で勝ち第1代表で新潟国体への切符を手に入れました。第2代表は岡山県が勝ち上がり出場を決めました。

本国体（新潟国体）では、ふるさと制度により、全日本代表の内藤選手らトップリーグ選手4名を擁する福岡選抜チームと1回戦を戦いました。主体チームの東芝とは春先から練習試合

をしていたので選手のデータも揃っており、不安はありませんでしたが、ふるさと選手の4名は普段から対戦する事も無いので何のデータも無く、4名の情報収集を徹底して行いました。

一番不安だったのは、この大会でも前日から雨の影響でグランドコンディションは最悪で、とても定刻通りに試合が開始出来る状態では無かったので、2年連続で中止に成らない事だけを祈りました。試合開始が4時間遅れ、モチベーションの低下が心配されましたが、以外に選手は冷静で、打倒‘福岡県’に集中していました。雨天の長い時間の待機は、昨年の大分国体の経験が充分生かされ、ほぼベストな状態で試合に臨めた気がします。

試合の方も、ふるさと選手4名にとにかく集中し、4名を塁に出さない、4名にチャンスが回らないディフェンスを徹底し、3対1で勝利する事が出来ました。昨年に続き、皇后杯得点も獲得出来少し肩の荷も下り、楽な気持ちで準々決勝の長野県（大和電機工業）戦を向かえました。

長野県（大和電機工業）は同リーグで1週間前に戦ったばかりでしたので、先取点は取られましたが慌てる事無く、すぐ同点に追いつき、最終的には6対2で勝利する事が出来ました。

準決勝は、全日本代表選手が13名中9名もいる群馬県と対戦しました。上野投手はもちろんの事、スーパースターが勢揃いの群馬県を一目見ようと、観客席だけでは足りない位の観客の多さにびっくりし、この中で島根県の選手はまともに戦えるのか心配でした。不安は的中し、初回2つのミスで2点を先取され、群馬県先発の坂井投手に完封され2対0で負けました。終了後、「2つのミスが無ければねえ」といわれる方もいましたが、内容は完敗でした。

この2年間は運もあり、何とか成績（優勝、3位）は残せましたが、まだまだ不景気な世の中。私たちの頑張りで、応援して下さいる会社や島根県民の方々に吉報が報告出来るよう、益々精進していきたいと思います。

まとまりのない文章になりましたことお許しください。

## 【最後に】

今までソフトボールを続けられているのは“どれだけの人の支えがあってここまで来たの”と私はよく選手に問いかけます。

私自身、ここまで続けてこれたのは、決して一人の力だけでは無く、沢山の人に支えて頂き、今の自分があると思っています。

選手も、会社・学校・家族・先生・仲間 e t c・・・の支えは充分に感じていると思います。だからこそ、感謝の気持ちはプレーで表すのが私たちの役目です。

長びく不況の中、取り巻く環境は日に日に悪くなり、練習時間・場所の確保だけで日々悪戦苦闘していますが、今年もソフトボールが継続出来るという喜びと、応援して下さいの方々への感謝の気持ちを忘れず、これからも頑張りたいと思います。

## 今月のことば

### 魔法の言葉

山陰中央新報の「副校長日記」というコラムに書かれた美山愛子先生（筆名）の記事にこんな部分がありました。

「・・・学校の帰りに近所のお店でチョコボールを3箱買い求め、急に学校へ来られなくなった子の家を訪ねた。「元気の出る魔法のお薬だから食べてね。」翌日からその子は、何事も無かったかのように笑顔で登校してきた。母親は驚いていたが、ちょっとエネルギー補給をただけ。理屈ではなく、子供や保護者の気持ちを感じ取っての行動だった。・・・」

このコラムを読んで、母親が子供の痛い所をさすってやりながら「痛いの痛いの飛んでけー」を繰り返すと、子供はケロツとした顔に変わる。あのシーンを思い出しました。

スポーツの指導者もこんな指導の妙と言われる、「魔法の薬（手）」や「魔法の言葉」をよく使っています。

言葉は古代から「言霊（ことだま）」とも言われるように、発した言葉どおりの結果をもたらす魔力があると言われていいますが、言葉に魔力を持たせるためには、指導者と選手の信頼関係、指導者の失敗や成功事例の蓄積（キャリア）、使う言葉や処方の仕方、指導者が個々の選手を見る観察力等をもとに、「今！」というタイミングを直感的に捉えることが必要です。そして、選手が指導者に抱く畏敬（いけい）の念と、選手がその言葉を受け入れる精神状態があってはじめて「魔法の言葉」になると思います。

私もかつて、「言葉の力」に興味を持ち、読んだ書物や人の話などを書き集め、拝借して使わせていただいて来ました。この子にはこんな言葉をかけてやろう。今、このチームにはこんな言葉を。大会直前にはこの言葉を。等と言葉の準備をして来ました。

特に大会に臨む前、選手のメンタルなコンディションを整える為に「自信、意地、誇り」という3つの言葉をよく使いました。そして、「自分達は、これだけの練習をしてきた。どこにも負けない練習をしてきた。」という実感を持たせる為に質量共に負荷をかけて練習し、その言葉が力を発揮する状況づくりをしてきました。

いつか、「魔法の言葉」になるかも知れない沢山の言葉を準備しておくことは、指導者にとって大きな力になると思います。

競技力向上統括アドバイザー  
荊尾 俊